

(仮称)淑徳大学戦史研究会会報 第1号

ハーネル

意味不明なる珍兵器、その魅力とはなにか 1

草薙素子

大本営陸軍部から見た玉砕 5

軍曹

太平洋戦争期の旧日本陸軍の小銃と機関銃 12

柏原

第一次インドシナ戦争時の仏軍小火器 15

山川栄

陸軍少将浅間義雄とセブ島の戦い 19

意味不明なる珍兵器、その魅力とはなにか

ハーネル

はじめに

本文では珍兵器の魅力を取り上げる。これを取り上げる理由は、単純明快にその異様な外見の面白さである。ただし、この文には私見が多く混じっている。このことを前提として、ご理解の程頂きたい。

珍兵器はなぜ生まれるのか

・珍兵器とはなにか？

もつと使いやすく、もつと速く飛ばしたい、もつと高性能に、などと理由は数あれ、何か訳があつて兵器は開発される。そんな時、開発された兵器は傑作か駄作かの二択で生まれがちだ。しかしながら、稀に「どうしてそうなつた」と、思わず呟きたくなるものが生まれる。ことがあ
る。これが珍兵器とよばれるものである。

・何故生まれるのか

兵器開発はまさに未知との戦いの連続である。新しい兵器を生み出すというのは、新しい技術の開発、使用が求められるがちである。それ故に、開発者も自らが触れたことのない技術や手法を使わざるを得ず、おかしな外見や設計となってしまうのだ。更に、技術的な面で未熟であることや、しっかりとした実験が行われていないことなどがある。これによって珍兵器は生まれてしまうのである。

珍兵器の何がおもしろいのか

・代表的な珍兵器

珍兵器として著名なものに、イギリスの開発した、パンジャンドラムというものがある。これは、筒の両端に大きな車輪を付けたような外見をしている。では、そのよう

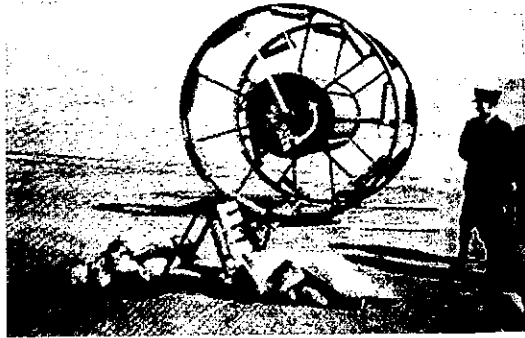
な兵器と呼んでよいのかすら微妙な外見をしたこの物体の目的は何か。それは、爆雷をねずみ火花火によって自走させ、敵の陣地を攻撃する。つまり、攻城兵器として使用するのである。結局は皆が想像できるように失敗作となり、試作段階で終わってしまった。

ドイツでは、ミステイルという爆弾が開発された。この爆弾は、旧式化のため自力での爆撃が非効率的になってしまった Ju88 爆撃機に、無人化、爆薬の機内への搭載、コックピット部針状化

などの改造を施したものである。運用方法は、爆撃予定地の手前まで

Bf109 戦闘機に牽引され移動し、分離、滑空して本体を丸ごとぶつけて爆撃するというものである。

他にも様々な奇想天外な兵器があるが本題は紹介だけではないので割愛する。

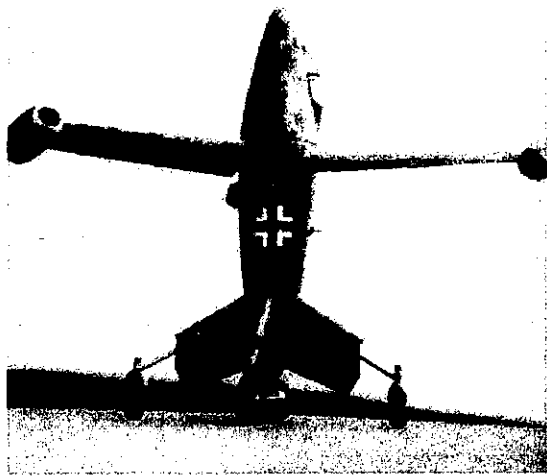


バンジャンドラム

未来へとつながる珍兵器

前述のように珍兵器は基本失敗に終わってきている。しかし、珍兵器の中には、発想自体は非常に先進的であり、当時の技術力では不可能であっただけで、戦後や現代にその発想が一般化した例も少なからずある。一般に知られている技術としてはジェット戦闘機がある。最近騒がれている F35 戦闘機、これは現在最新鋭のジェット戦闘機である。ジェット戦闘機の大本は、第二次世界大戦末期にドイツの開発した要撃機である。要撃機とは、迎撃のために一気に上昇し、高速で敵の爆撃機を迎撃することに特化した戦闘機である。当時は開発費や生産費がとて高く、多くが実戦に投入されることは無かった。その上、少し不格好な見た目をしており、信頼性や航続距離で難点があった。しかし、今現在ではジェット戦闘機は当たり前のもとなつた。寧ろこの技術が一般的でなかつた頃、航空機に広く用いられていたレシプロエンジンは、現在戦闘機では見なくなつてしまった。かつては安定した技術ではなかつたジェット戦闘機は、実は大戦時のくせ者兵器からの出である。

ジェット戦闘機だけではない、他には第二次世界大戦末期から冷戦期にかけて、様々な国が開発を試みてきては失敗した垂直離着陸機 (VTOL 機) というシステムもあ



トリープフューゲル

られる。これは、現代でも当たり前でこそないが、これまでの研究が実を結び、イギリスのハリヤーという戦闘機が実現している。ハリヤーは様々な国の軍隊が導入し、名機といえる存在となつた。(イギリス、ドイツは珍兵器大国であるが、現代やのちの世に実現したり一般化する発想を生み出すことが多い) 垂直離着陸機の研究は、名機の誕生へ発展することになったが、前述のように様々な国が研究、実験、失敗を繰り返してきた分野であった。垂

・珍兵器の何が他の兵器と比べおかしのか
まず珍兵器と呼ぶ上で珍しい兵器であるのは想定がつくであろう。しかし、特に軍事に興味のないものからしたら、どんな兵器も不思議に見えるはずである。ではなぜ珍兵器と呼ぶのか。それは一般の人が見てても「おかし」と思い、面白味を感じることができからである。例えば、氷山を航空母艦にする、自転車に機関銃やロケットランチャーをつける、地面を潜るモグラ戦車、といった発想があげられる。これらは、聞くだけでも訳のわからないものであり、見た目もおかしい。そんな意味も意義も判らない様なものであるからこそ珍兵器と呼ぶのである。

おかしなのは外見だけではない。設計思想も並はずれている。冷静に考えて、素直に動くはずがない見た目や構造をしており、開発段階で気付けたであろう構造上の欠陥を孕み、とても兵器と呼ぶには堪えないものばかりなのだ。兵器というのは、本来は信頼性と利便性を兼ね備え、兵器として普通に使えるものでなければならぬ。そんなことを無視して、設計者は軍上層部の理想と浪漫的塊を具現化してしまったのである。これが他の兵器と珍兵器との圧倒的な違いであり、珍兵器のおかしな点である。

直離着陸という名の通り、直上に発進して真つすぐ降りてくる仕組みであるゆえに、戦闘機を縦にしたような姿や尾翼が四つつけられた姿を各国はさせてきた。たとえば、ドイツのトリップフリーゲルや、アメリカのコンベア XF-119があげられる。これらは、なかなか荒ぶった見た目、明らかに真つすぐ降りて来られない姿となっていた。垂直離着陸機は、まさに珍と目にした目の兵器の山を築き上げてきた過去からのバトンのつながり末に完成したのである。

以上のように、おかしい見た目であったり、かつては実現不可能であった珍兵器も、後世になつて見直され、技術が実現するなどの幾つかの要因により、現代の最新技術へとつながることがあったのである。

おわりに

私が本文を通して伝えたいのは、珍兵器のおかしさ、面白さである。だが、一番につたえたいのは、兵器以外にも言えることであるが、今は不可能そうであったり、ばかばかしい夢物語のような技術であっても、決して諦めたりしなければ、将来当たり前になり、それまでの失敗が必要な過程であったといわれる時代が来るかもしれないということである。「おかしい見た目、変な機構、実現できそうにない」そんな言葉を何度もかけられたであろうか？

大本営陸軍部から見た玉砕

草薙素子

はじめに

本文は、おもに陸軍から見た玉砕戦について述べたものである。参考にしたものは、大本営陸軍部第二〇班(戦争指導班)の『機密戦争日誌』である。その中でもおもに中部太平洋の玉砕に焦点を当てる。この地域の玉砕は生存者が極端に少なく生存者の証言がほとんどない。そのため、『機密戦争日誌』のような中央の記した文献資料から陸軍が玉砕についてどのような記録を残したのか、ということについて本文で述べる。

アッツ島の戦い(一九四三年五月十二日～二十九日)

アッツ島の戦いは、日本軍最初の玉砕戦と言われている。アッツ島は、アリューシャン列島に位置するアメリカ合衆国の領土である。一九四二年六月、日本軍は、米軍によ

ての開発者たちが、もしそこであきらめたりしていたら、今の当たり前はなかったかもしれないのだ。そう考えてみて欲しい。珍兵器たちは決してただのガラクタや変な見た目のゴミではない。今の世につながる人類の技術開発の過程の痕跡なのだ。直接的にはつながっていないけれども、現在へとつながる一歩一歩だったのだ。

珍兵器は見た目の面白さだけでなく、将来への期待も持たせてくれる実に素晴らしいものなのである。

参考文献

- ・岡部たさく『世界の駄っ作機 4』(大日本絵画、二〇〇九年)
- ・同『世界の駄っ作機 5』(大日本絵画、二〇〇九年)
- ・同『世界の駄っ作機 7』(大日本絵画、二〇一四年)
- ・桜井英樹、小貫健太郎『もしも WEAPON 完全版(世界の計画・試作兵器)』(イカロス出版、二〇一七年)
- ・異形の航空機 軍用ドローン編 写真特集(時事通信社 時事ドットコムニュース)
- ・河野嘉之『図解 戦闘機』(新紀元社、二〇〇九年)

る北方からの日本本土侵攻を防ぐためにこの島を占領した。しかし、一九四三年五月十二日、米軍は島の奪還のために上陸を開始した。上陸した米軍は、第五十一機動部隊に支援された陸軍第七師団一万一〇〇〇人。対する日本軍は、山崎保代大佐率いる北海守備隊二五〇〇人。守備隊の抵抗は激しく米軍は苦戦したが、五月二十九日に最後の突撃を敢行し、全滅した。生存者はわずか二九人であった。

『機密戦争日誌』では、米軍上陸時の記録はない。アッツ島に関する記述が初めて登場するのは、五月二十九日である。このときの日誌では、アッツ島における米軍上陸を「熱田島事件」と呼称している。五月二十六日、大本営会議において



山崎保代

熱田島事件の作戦計画が決定される。五月三十日、大本営発表により、アッツ島守備隊の全滅が国民に伝えられ、初めて「玉砕」の呼称が使われる。山崎保代大佐は、最後に敵の編制や装備、戦法、教訓などを報告後、「他二策無キアラサルモ武人ノ最後ヲ汚サンコトヲ虞ル英魂ト共ニ突撃セン」と打電したという。五月三十一日、アッツ島の戦いについての敗因を述べている。第一に、海軍が船舶の消耗を避けるため、アッツ島守備隊の救援をしなかったこと。第二に、占領中の一年間、島の要塞化に力を入れなかったことを挙げている。



全滅したアッツ島守備隊

タラワ・マキンの戦い
(一九四三年十一月二十一日～二十五日)

タラワとマキンは、ギルバート諸島にある環礁で、現在は、キリバス共和国の国土の一部である。サイパン攻略を計画していた米軍は、マーシャル諸島での拠点確保を目指していた。そのため、戦線で突出していたギルバート諸島を先に攻略しようとした。一九四三年十一月十三日、米軍による空襲が始まった。十九日になると、米軍は、二〇〇隻もの艦隊で激しい砲爆撃を行なった。二十一日、タラワに第二海兵師団一万八〇〇〇人が上陸を開始した。日本軍は海軍の柴崎恵次少将が率いており、その戦力は、佐世保第七特別陸戦隊を主力とした第三特別根拠地隊と日本人や朝鮮人の労働者で編成された設営隊、合計四五〇〇人である。日本軍は、米軍の上陸第一波を撃退するなど激しく抵抗したが、柴崎少将の戦死後、戦況は悪化し、二十五日にタラワ守備隊は玉砕した。生存者十七名。時を同じくして二十一日、マキンにも陸軍第二十七師団六五〇〇人が上陸。七〇〇〇人の日本軍守備隊もタラワと同じく勇戦したが、二



柴崎恵次

十四日、玉砕した。生存者は一名であった。

『機密戦争日誌』では、十一月十九日に米軍上陸と記述されている。タラワ・マキンには、海軍陸戦隊約一〇〇〇人が守備しており、戦況は不明である。さらに、米軍を「囚に乗つてい



タラワの戦い

る」と揶揄している。二十一日、米軍上陸時の記事はない。二十五日、アメリカがギルバート諸島での戦いを大々的に宣伝しているとある。未だ戦況は不明で、玉砕によりタラワ・マキン守備隊には、米軍と心中してもらおうとある。二十六日、米軍により、タラワ・マキン占領。これらことから、陸軍は、ギルバート諸島での戦いの情報をほとんど得ていなかったことがわかる。まず、終始戦況について不明であり、味方の戦力、上陸や玉砕の日にちが史実と食い違う。よって、陸軍は情報不足であったと考えられる。

クエゼリンの戦い

(一九四四年一月三十日～二月六日)

クエゼリン環礁は、マーシャル諸島にある世界最大の環礁である。ギルバート諸島を攻略した米軍は、艦隊の停泊地やサイパン島攻略のための拠点を作らためマーシャル諸島攻略を計画した。日本軍は、クエゼリン島に第六十一警備隊(山形政二海軍大佐)を基幹とした第六根拠地隊(秋山門造海軍少将)と陸軍の海上機動第一旅団(阿蘇太郎吉陸軍大佐)を主力とする五〇〇〇人(海軍四〇〇〇、陸軍一〇〇〇)、ルオット島ナムル島に第二十四航空戦隊(山田道行海軍少将)を主力とする三〇〇〇人。総勢八〇〇〇人がクエゼリン環礁を守備していた。一九四四年一月三十日、米軍は上陸支援のための大規模な空爆と艦砲射撃を行い、日本軍は、戦力の大半を失った。二月一日、陸軍第七師団二万二〇〇〇人がクエゼリン島へ上陸を開始した。さらに、二日には、第四海兵師団二万二〇〇〇人がルオット島へ上陸した。クエゼリン島では、二日に秋山少将が戦死し、守備隊も次々と全滅した。ルオット島でも、事前の上陸支援



秋山門造

攻撃で山田少将が戦死しており、組織的な戦闘ができず全滅した。こうして、クエゼリンの戦いは、日本軍の玉砕という結果で終わった。生存者は一〇〇人ほどであった。



クエゼリンの戦い

『機密戦争日誌』では、米軍上陸は二月二日としている。米軍の戦力は、二個師団と想定しているが、詳細は不明であることが記述されている。しかし、この記事以後、クエゼリンについての記事はない。

ビアク島の戦い

(一九四四年五月二十七日～八月二十日)

ビアク島はニューギニア西部に位置する島である。米軍は、マリアナ諸島の攻略に先立ち、この島の飛行場占領を目的として一九四四年五月二十七日に上陸を開始した。米軍は、第四十一師団と第二十四師団を基幹とし

を維持できた事例は、ビアク島のみである。その功に対して、昭和天皇からたびたび嘉賞があり、寺内寿一南方軍総司令官も感状を授与した。葛目大佐は、死後特旨をもって陸軍中将に任じられた。米軍も、ビアク島の日本軍の抵抗をニューギニア作戦最大と評している。



撃破された95式軽戦車

五月二十八日の『機密

戦争日誌』には、二十七日朝、敵一個師団がビアク島に上陸中。ビアク島守備隊は陸軍歩兵三個大隊と海軍部隊を基幹として、後方勤務部隊を合わせると一万人強であると記されている。五月二十九日、ビアク島の敵は、二か所橋頭堡の占領に成功。さらに、南方軍からは、ビアク島の米軍撃滅のための意見具申があった。第一案は、戦艦二隻と海上機動旅団(約五〇〇〇人)によるビアク島突入。第二案は、巡洋艦及駆逐艦によって、海上機動旅団をソロンとマノクワリに進出させ、ビアク島に突入。この二つの案は、中央でも採用されていると記事にある。五月三十一日、ビアク島の友軍が勇戦中。六月四日、本

た第六軍、約三万人であった。対する日本軍は、歩兵第二百二十二連隊(葛目直幸陸軍大佐)を基幹とするビアク支隊、第十九警備隊を基幹とした第二十八特別根拠地隊(千田貞敏海軍少将)の総勢二万二〇〇〇人である。しかし、戦力の大半は設営隊などの後方勤務部隊が中心で、戦闘部隊は四五〇〇人ほどであった。二十七日から始まった戦闘は、米軍を何度も撃退するなど日本軍優勢で進んだ。しかし、米軍の戦力が次第に強化され、日本軍も徐々に押されはじめた。六月二十一日、飛行場陥落。六月二十七日、日本軍の拠点である西洞窟が占領され、七月二日に葛目大佐が自決。八月二十日、米軍は、ビアク作戦の終結を発表したが、残存兵力は終戦まで戦い続けた。千田少将は、十二月二十五日に戦死したと言われている。日本軍の生存者は、終戦後に捕虜になった者も合わせて五〇〇人ほどであった。余談だが、米軍上陸から一ヶ月以上も飛行場



西洞窟

日夜二十二時に海上機動第二旅団がビアク島に突入予定。六月五日、渾作戦(ビアク島に上陸した米軍を陸海協力して撃滅しようとした作戦)は、敵機に発見され一時中止、部隊はソロンに待機。六月十三日、渾作戦再興のため、戦艦扶桑、武蔵と潜水戦隊を使用して十四日にソロンを出港予定。この記事以降、ビアク島に関する記事はなくなる。その原因として、六月十五日にサイパン島に米軍が上陸したことがあげられる。一九四四年の六月から八月までの期間は、米軍がマリアナ諸島攻略に着手しており、日本軍の関心もマリアナ諸島に集中している。そのため、ビアク島で守備隊が善戦していても記事に載らなかったと考えられる。

サイパンの戦い(一九四四年六月十五日～七月七日)

米軍は、日本本土を空襲圏内におさめるため、一九四四年六月十五日、サイパン島に上陸を開始した。米軍は、第五艦隊と第五十八任務部隊に支



南雲忠一

援さ

れた第二海兵師団、第四海兵師団、陸軍第二十七師団の総勢六万六〇〇〇人。日本軍は、第四十三師団(斎藤義次中将)。さらに、独立混成第四十七旅団、第九派



マリアナ沖海戦

遣隊、戦車第九連隊、高射砲第二十五連隊、独立山砲第三連隊、独立工兵第七連隊などを加えた陸軍部隊二万八〇〇〇人。中部太平洋方面艦隊(南雲忠一中将)、第五根拠地隊(辻村武久少将)、第五十五警備隊、横須賀第一特別陸戦隊などを主力とした海軍部隊一万五〇〇〇人。総勢三万人超の日本軍がサイパン島を守備していた。また、二〇〇〇人の民間人が島に取り残されていた。日本軍は、上陸部隊に対し善戦したが、六月十九日から二十日にかけて行われた「マリアナ沖海戦」で日本海軍機動部隊が壊滅すると日本軍守備隊の勝利は絶望的になった。七月六日には、南雲中将、斎藤中将ら日本軍司令官が自決した。この時点の残存兵力は、陸海軍将兵や在留邦人合わせて三〇〇〇〇人にまで減少していた。七月七日、残存兵力は、米軍陣地に対し最後の突撃を開始した。この突撃は、米軍からは「バングサイ突撃」と呼ばれている。昼ごろ、夥しい数の死体を

残して日本軍守備隊は全滅した。七月九日になると在留邦人が島の北端に追い詰められ、次々と崖から身を投げていった。米軍は、この崖のことを「バンサイクリフ」または「スーサイドクリフ」と呼んでいる。サイパンの戦いは、これまでの玉砕戦と違い、民間人を巻き込んだ戦いとなった。日本軍守備隊は、三万人以上が戦死し九〇〇〇人ほどが捕虜となった。民間人も一万人以上が犠牲になった。

『機密戦争日誌』によると、米軍のサイパン島上陸は、六月十五日である。敵の兵力は、一個師団と判断している。サイパン島守備隊の兵力は、陸軍十二個大隊と海軍一個大隊。海軍は、「あ号作戦」(中部太平洋・比島・豪北方面において一大反撃を企画した作戦)を決意。六月十六日、サイパンの敵兵力は、二個師団と判断される。六月十八日、サイパン守備隊は、敵の攻撃により苦戦中。斎藤義次中将及び幕僚戦死の報告があった(真偽不明)。サイパン確保のために二個師団を増加し「あ号」の即時実行を命令。六月十九日、本日午前、海軍機動部隊が交戦したが、夕刻になっても状況は判明しなかった。帝国海軍の運命を決める大海空戦であり、最悪の場合になっても、せめて相打ち程度になることを大本営は祈っていた。六月二十日、昨日の海空戦において海軍艦載機主力(三〇〇〇機)を喪失。艦隊は、退避しているが状況不明。この日の大本営の空気は暗かったと記されている。六月二十

一日、昨夜の艦隊退避作戦は、敵に追撃され相当の損害を出したことが判明。六月二十三日、「あ号」作戦の再興を決意。しかし、六月二十四日、「あ号」作戦は中止される。すなわち日本は、サイパン島を放棄したことになる。来月上旬には、サイパン守備隊は玉砕すると予想。六月二十九日、サイパンの邦人に対し総理より激励電報の打電を計画するが、大本営政府連絡会議において中止が決定。七月六日、昨日をもつてサイパンとの連絡が杜絶。在留邦人は、島の北端に集結。戦闘員は、陸海軍最高指揮官と共に最後の突撃を行い全員玉砕。戦略兵団の玉砕は、今回が初めてであり、アッツ島玉砕とは、本質的に趣が異なると記した。この



玉砕したサイパン守備隊

記事以降、サイパン島守備隊に関する記述はない。

おわりに

私は、今回、中部太平洋の玉砕戦を中心に調べた。この地域における玉砕戦の特徴の一つとして、生存率の低さが挙げられる。したがって、日本軍側の戦闘詳報や日記等は残っていないため、現地部隊の戦闘に関する情報は得られない。そこで、陸軍中央から玉砕戦を見てみた。陸軍中央は、敵戦力や前線の戦況を把握していなかった。特に海軍が主力の玉砕戦では、戦闘経過に関する記述などが不足していた。このことから、陸海軍の間で情報共有があまりされていなかったと考えられる。

参考資料

- ・大本営陸軍部戦争指導班『機密戦争日誌』(錦正社、二〇〇八年)
- ・太平洋戦争研究会『太平洋戦争のすべて』(三笠書房、二〇一二年)

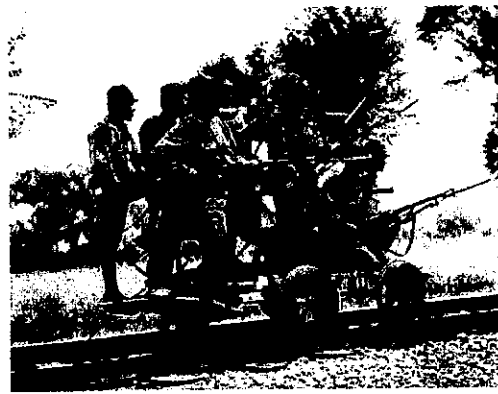
太平洋戦争期の旧日本陸軍の小銃と機関銃 軍曹

はじめに

今回私は、太平洋戦争において旧日本陸軍が使用していた小銃と機関銃について調べることにした。戦争では決して欠かすことのできない小火器は、戦場で戦う兵士たちにとつては命綱になる。旧日本陸軍の小火器の性能と、それらがどのように活躍したのかを紹介していく。

三八式歩兵銃と九九式短小銃

旧日本陸軍が使用していた小銃は「三八式歩兵銃」と呼ばれる明治三十八（一九〇五）年に正式採用された銃だ。この銃の原型はドイツのモーゼル銃であった。三八式歩兵銃は銃身が約八十センチ、重量が約四キロとやや重く、口径は六・五ミリだった。実戦では約五十メートルから三百メートルの間合いで撃っていたそうだ。銃身が長



三八式歩兵銃を持って線路を行く日本兵

いため命中率は高い。しかし、六・五ミリが命中しても相手が即死するわけではなかった。

それでも、負傷兵はもう戦力にはならない。そのため、衛生兵を呼び、後送をする必要が出てくるため、敵陣営の戦力を確実にそぐことができるため、採用が許されたといわれている。

日本軍の機関銃の特徴

太平洋戦争の二年前にあたる昭和十四（一九三九）年、口径が七・七ミリの「九九式短小銃」が正式採用された。威力としては、自動車のエンジンを撃った時、三八式なら小穴が開く程度だったのに対し、九九式は発火炎上する程のものであった。しかし、全ての兵隊の銃を一挙に替えることは困難であったため、ほとんどの歩兵部隊は三八式を担いで戦場に出た。

もちろん、歩兵部隊は小銃だけで戦ったわけではない。歩兵部隊の守り神として、機関銃も使用していた。機関銃には軽機関銃（軽機）と重機関銃（重機）の二種類があった。歩兵部隊は分隊（十三名）、小隊（五十四名）、中隊（百八十名）、大隊（八百八十一名）、連隊（三千九十二名）という編制をとるが戦時の標準だ。「九九式重機関銃」は一個大隊に四門が配備された。九九式は重量が約五



射撃体勢のときの九二式重機関銃



射撃中の十一年式軽機関銃



対空戦闘時の九六式軽機関銃

十二キロと非常に重かったため運搬に苦勞した。そのため、三人一組で運搬したり、馬に引かせたりした。しかし、この重さがあつたおかげで、発射するときの反動は少なかつた。アメリカ軍はこの銃をウッドベッカー(キッツキ)と呼んでいた。軽機は「二十一年式軽機関銃」と「九六式軽機関銃」、「九九式軽機関銃」があり、一個分隊に一挺配備された。重量は約九キロで三八式歩兵銃一本分程の重さであり、一人で持ち運びが可能だつた。九六式、九九式は日本軍の機関銃の中でも最高傑作のものであり、素晴らしい性能を発揮した。この二種は着剣が可能であり、軽機に銃剣を着けて戦闘をするスタイルをとっていたのは日本軍だけだつたそうである。

おわり

太平洋戦争時、日本軍は多くの小銃や機関銃を戦場に導入していたことが調べて分かつた。しかし、日本軍の場合、資源が乏しいということもあつて、戦局が悪化の一途を辿ると、兵器の質が低下してしまつた。そのため、武器が本来の性能を発揮することが出来なくなつてしまひ、追い詰められてしまつた。

日本の敗因は武器だけではない。精神論にこだわりすぎたこともあげられる。日本は進歩よりも精神主義を貫いてきた。しかし、進歩しないものはいつまで経つても先

へ進まない。進歩を軽視してしまえば、他国に遅れを取るため、そういつたところが戦いにも響いてしまう。さらに、無謀な戦争に突入してしまつたこともあげられるだろう。兵器の質がいかに優れていようと物量に押されてしまつては意味がない。当時の日本としてはどうすることもできなかったのかもしれない。

もし、これらのことを改善していれば、三百万人という犠牲者はでなかつたのではないかと私は考える。

参考資料

・太平洋戦争研究会『武器・兵器でわかる太平洋戦争』(日本文芸社、二〇一五年)

第一次インドシナ戦争時の仏軍小火器

柏原

初めに

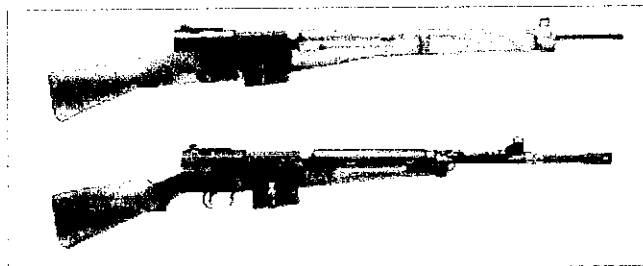
第一次インドシナ戦争とは、第二次大戦直後に植民地の再統治を目指すフランスと、これに抵抗するベトナムとの間に生じた戦争である。この戦争は、単なる植民地における内乱に終わらず、共産主義対資本主義の争い、つまり東西冷戦に内包される程の戦争へと発展していった新たな型の戦争であつた事が特異的であつた。この、今迄にない戦争に挑んだ新たな仏軍の小火器を本稿にて取り上げる。

半自動小銃

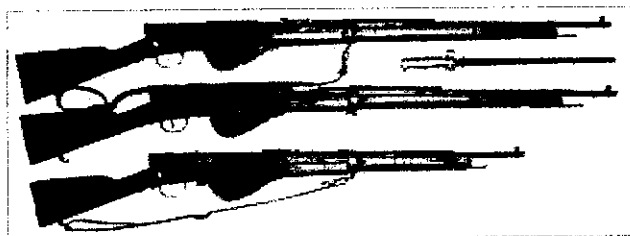
当時の仏軍の制式小銃は「MAS-49」と称される半自動小銃である。半自動小銃という物は従来の歩兵銃とは

異なり、ボルトの操作なしで、引き金を引く度に弾丸が一発ずつ発射される小銃である。つまり装填は自動で行われ、発射は自力で行うという事である。その歴史は古く、第一次大戦を迎える頃には欧州列強各国にて数々の半自動小銃が試作された。仏軍に於いては「RSC」と称される銃が戦中、戦後を通じて改良され続けた。その後、第二次大戦時においても半自動小銃の開発は続き、MAS-49への道を拓いたのである。仏軍半自動小銃の集大成ともいふべきMAS-49は高い信頼性と命中精度を誇り、およそ三十年間、制式小銃として君臨したのである。MAS-49の作動方式はリネグマン式であり、これが高い命中精度を保証した。さらに銃左側面にあるレールを介して照準器を取り付ける事ができ、これも高い命中精度の実現に貢献した。弾倉は着脱式であり、装弾数は十発である。装填についてはクリップによる五発毎の装填

も可能である。弾薬は7.5×54mm弾を用いている。MAS-49は採用早々に「MAS-49/56」と称される短銃身型が開発されている。これは、機械化歩兵部隊や空挺部隊における運用を容易な物とする為に改良された物である。



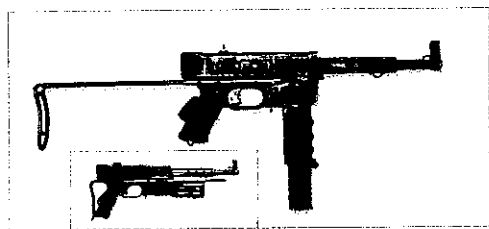
MAS-49 (上) とMAS-49/56(下)



RSC

短機関銃

優秀な小銃であったMAS-49であるが、近距離戦は不得手であり、これを補う小型軽量かつ連射可能な銃が求められていた。それが「MAT-49」である。本銃は9×19mmパラベラム弾を用い、オープンボルト式の作動方式を有する短機関銃としては標準的な物である。本銃の特徴は高い生産性と、信頼性、軽便さにある。本銃の生産にあたってはプレス加工が多用され、整備を容易な物とする為、半自動射撃機能は省略された。更に運搬を容易な物とする為に銃床、マガジンハウジングは折り畳み可能な物とされた。

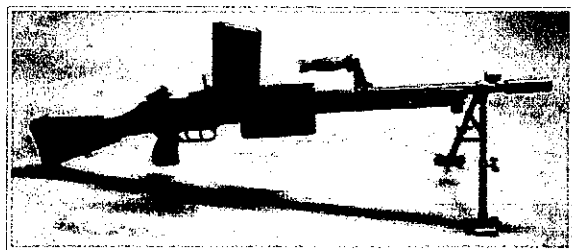


MAT-49

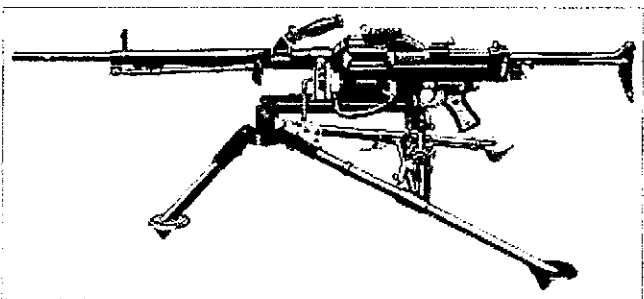
軽機関銃

仏軍が当時用いていた軽機関銃は「FM mle 1924/29」と称される銃である。弾薬は小銃と同じ、7.5×54mm弾を用いている。本銃は自動、半自動射撃のそれぞれに対応する二個の引き金を有している事が特徴的である。外見上の特徴となっ

ている銃上部に設けられた弾倉は、伏射時の装填を迅速な物とする事を可能としている。本銃は第二次大戦前の物である為か、後述の汎用機関銃が配備され始めると徐々にその姿を消していった。



FM mle 1924/29



AA-52 (三脚使用時のイメージ)

汎用機関銃

FM mle 1924/29に代わる機関銃として採用された物が「AA-52」と称される汎用機関銃である。弾薬は小銃と同じ、7.5×54mm弾を用いており、給弾方式はベルト式である。本銃の特徴は、高い生産性を可能としたプレス加工を用いていることと、迅速な銃身交換を可能としたキヤリングハンドルを有していることである。プレス加工は先々代の制式機関銃であるショーシャ機関銃の頃より仏軍にて模索されてきた技法である。

終わりに

第一次インドシナ戦争は初め、フランスが優勢であり、ベトナムの各要衝の確保に成功していた。しかし、ベトナム首脳部の捕縛には失敗していた。これがフランスの敗因となった。ベトナム首脳部はベトナム北部の山岳地帯を逃れ、ベトナム構成員はベトナム全土へと展開し、ゲリラ戦を遂行した。彼等は隣国である中国より数多くの援助を受けた。対するフランスはゲリラ戦への効果的な対策を見いだす事ができず、現地住民の信頼を得る事もできず、徐々に追い詰められていった。決死の大作戦として行われた「ディエンヒエンフーの戦い」においても敗北を喫したフランスは、遂に自力でのベトナム鎮圧を諦め、米国の介入

を求めた。これが後のベトナム戦争である。

用語解説

- ・ベトナム
ベトナムに於ける共産主義勢力。フランスからの独立を目指す。
- ・機械化歩兵
装甲車両に乗って移動し、戦場では下車戦闘を行う歩兵。
- ・マガジンハウジング
マガジンと銃本体との接続部に設けられた覆い。銃内に部に砂等が入り、銃が故障する事を防ぐ。
- ・キヤリングハンドル
銃身か銃本体に設けられた運搬用の把手(とつて)。
- ・デイエンビエンフーの戦い
第二次インドシナ戦争最後の戦い。フランスはデイエンビエンフーに要塞群を築き、敵軍を待ち受け、壊滅させる事で戦争を終結させる狙いがあったが、ベトナムは中国より供与された重砲を以て要塞群を壊滅させ、勝利した。

陸軍少将浅間義雄とセブ島の戦い

山川栄

陸軍少将浅間義雄。彼の名を知るものは極めて少ないことだろう。もし知っているなら、一九三七年(昭和十二年)の第二次上海事変に参加した一連隊長としてであろう。筆者自身、浅間を取り上げた論文「浅間義雄陸軍少将の最期」を偶然読み、その存在を知った。『日本陸軍将官辞典』における浅間の記述は次の通り。

浅間義雄(歩兵 山形)

明1887.251-昭20.9.3(昭12.11.1
陸軍少将)昭12.11.1留守八師団司令部司
令部附、14.8.1待命、14.9.3予備役「陸
士18」

たったのこれだけだ。これだけを読めば、浅間は太平洋戦争以前に現役を終えた、ごく普通の将官に思えてし

まう。しかし、浅間の軍歴はここでは終わらなかった。浅間は太平洋戦争直前に応召し、戦時下のフィリピンへ出征、そこで悲劇的な事件に関わり、病死したのであった。本文では、陸軍少将浅間義雄とフィリピン、セブ島における彼の行動について記す。

現役時代の浅間義雄

浅間は、一八八五年(明治十八年)七月二十五日、米沢市越後番匠町に浅間義昌の長男として生まれた。では、ここで現役時代の浅間の経歴を述べよう。
一九〇五年(明治三十八年)十一月 陸軍士官学校を卒業。(十八期、歩兵科)

一九一〇年(明治四十三年) 中尉。陸軍戸山学校に分遣、成績優秀につき恩賜の時計を賜わる。



昭和12年9月20日
上海にて撮影された浅間

一九三九年(昭和十四年)八月一日
待命。
同年九月三日 予備役編入。
以上である。

この経歴の中でも、歩兵第四十三連
隊長として参加した第二次上海事
変は、彼の最も輝かしい経歴といえ
る。浅間の率いた部隊は、激戦の上
海を突破し、白茆新市(この場所の

詳細は不明)にたどり着いた。その戦

いぶりは「浅間神速部隊」などと新聞に書かれたほど
だった。十一月一日、浅間は少将に昇進したが、後任の
連隊長花谷正大佐(陸士二十六期、後に中将)が到着す
る十五日まで部隊を指揮していた。

浅間は帰国後、大阪朝日新聞本社を訪れ、次のように
話したそうだ。

戦地にのこした部下のことがいままも一番気にか
かるのだが、その話をするのが私には最も苦しい
ことなのだ、察してくれ

陸軍司政長官としてのフィリピン赴任

一九四一年(昭和十六年)三月、浅間は応召し、参謀

一九一二年(明治四十五年) 天津に駐屯。
一九一四年(大正三年) 中隊長として青島に従軍(第
一次世界大戦)。
一九二一年(大正十年) 大尉。遼陽に駐屯。
一九二三年(大正十二年) 少佐。配属将校として浜松
師範学校に勤務。
一九二七年(昭和二年) 歩兵第三十二連隊長。後
に陸軍歩兵学校に分遣。

一九三一年(昭和六年) 中佐。第八師団副官。一九三
三年頃までの間、満州事変(熱河作戦)に参加。
一九三三年(昭和八年) 大佐。秋田連隊区司令官。
一九三五年(昭和十年)十二月 歩兵第四十三連隊長。
支那事変に参加。

一九三七年(昭和十二年)十一月一日 少将。留守第八
師団司令部付。



昭和17年10月末
比島に赴く直前の浅間

本部附となった。そして、太平洋戦争開戦後の一九四二
年(昭和十七年)十月三十一日、陸軍司政長官として
フィリピンに派遣。十一月末に軍政監部南部ルソン支部
長となり、ルソン島レガスピに駐在する。司政長官とは、
南方諸地域の占領地軍政に従事する「司政官」のうち勅
任の者のことを指し、具体的な任務は治安維持、産業や
軍需資源の開発であった。

一九四三年(昭和十八年)十月頃、フィリピン独立によ
り軍政監部は解散し、かわりに比島政務班が置かれ、軍
政監部支部は地方連絡官事務所と名を変えた。十二月、
浅間はビサヤ地方連絡官となり、セブ島に駐在する。地
方連絡官の任務とは、担任地区内の地方機関(フィリピ
ン人の組織)と日本軍部隊などの日本の組織の間の連絡、

地方機関の補導と動向査察、軍管理事業の監督など多
岐に渡った。

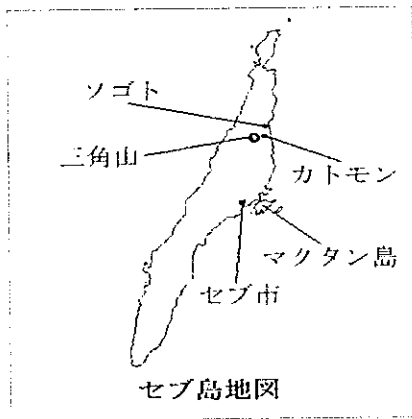
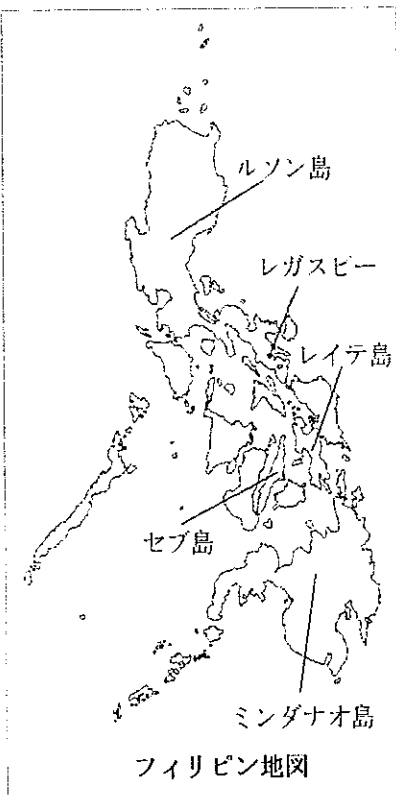
一九四四年(昭和十九年)九月二十二日、フィリピンに
戒厳令が施行され、セブ島に置かれていた第二十五軍
(尚集団)は「尚作命甲第二十七号」を発令。この命令によ
り、ビサヤ地方連絡官は尚集団の区処を受けることにな
る。

三十日、「尚作命甲第三十六号」が発令。浅間は尚集団
司令部に兼勤することになった。加えて、浅間を長とす
る「浅間機関」が編成された。この機関には尚集団後方
参謀の杉本森雄中佐が兼勤することになった。浅間機関
の任務は、尚集団の命令に基づき、ビサヤ地区戒厳司令
官(グリヤス氏、ビサヤ地方長官、地域の政府代表)の補
佐と指導を行うことであった。

十月二十日、レイテ島に米軍が上陸する。これに伴い、
セブ島防衛のための陣地構築、食糧の生産が急がれた。
この作業には老齢の浅間も率先して参加し、部下を励ま
した。

十二月十三日にミンダナオ島の北方に米軍大船団が
発見された際には、浅間はゲリラへの兵器、物資の補給
を行っているのだろうと意見を出している。

米軍のセブ島上陸と邦人管理部隊



一九四五年三月二十六日、ついにセブ島に米軍が上陸する。防衛戦を続けていた日本陸海軍は、四月十六日、ついに北方への転進を開始した。

五月二十三日、カトモン川中流にいた浅間は、セブ市内などから転進してきた「邦人管理部隊」を指揮することになる。このことは、おそらく尚集団の命令によるものと筆者は考えているが、詳細は不明だ。

一〇で登場した「邦人管理部隊」は、五月二十二日に臨時に編成された、複雑な寄せ集めの部隊である。その編成には、少なくとも四つの部隊が関わっている。それらの部隊について説明しよう。

一つ目は「服部部隊」。指揮官は服部淳一中佐。服部は

第五野戦船舶廠第二支隊長③で、マクタン島守備隊長を務めていた。一九四四年十月頃に上官の光井一治大佐(第三船舶輸送司令部セブ支部長、セブ沿岸守備隊長)が船舶部隊主力を率いてレイテ島に進出した後、服部はセブ沿岸守備隊長代理となった。このときに服部を中心にセブ市周辺の船舶部隊の残留者等を集成したものが服部部隊とみられる。米軍上陸後は「男子義勇軍」(指揮官は酒井三郎予備主計大尉、セブ島の現地召集者で編成)④を指揮下に加え防衛戦を展開、後に陣地が突破され、部隊は第百二師団(抜兵団)司令部のあった天山方面に退却した。

二つ目は「第十四方面軍野戦貨物廠中南部比島支廠」。

この部隊の任務は被服や食糧等の物資の補給である。支隊長は高岡尚主計中佐であるが、彼は十月二十日に主力を率いてレイテ島に進出したため、セブ島の残部は青木大尉なる人物が指揮を執っていた。

二つ目は「第十四方面軍野戦自動車廠中南部比島支廠」。任務は自動車の修理補給である。支隊長は亀水大尉だが、彼もまた十二月上旬にレイテ島に進出しており、その後は長田節彦中尉が指揮した。米軍上陸に際しては四月十六日の転進開始まで戦闘を行った。

四つ目は「第十四方面軍野戦兵器廠中南部比島支廠」。任務は兵器、弾薬等の補給である。支隊長は小迫大尉であるが、彼もレイテ島に進出している。セブ島の残留部隊の指揮官は不明だ。

これら四つの部隊は、一九四五年四月十六日に北方への転進を開始し、五月二十二日にはカトモン川中流で服部中佐指揮のもと邦人管理部隊を編成した。これが二十三日に浅間の指揮下に加わったのである。

当時セブ島には一種の邦人がいた。「男子義勇軍」を構成した身体の丈夫な男子約四三〇名と、パラワン島から引き揚げてきた婦女子二五〇名余である。邦人管理部隊はこれらの邦人たちを抱えていたのである。なお、セブ島在住の老幼婦女子は日本に帰国させられていたとされている。⑤

しかしながら、浅間と四つの部隊は二十三日以前から

行動を共にしていた可能性がある。

志柿謙吉海軍大佐(セブ島に展開していた海軍第三十三特別根拠地隊の先任参謀兼副長)は海軍補給隊長長柳原主計少佐(第百二海軍軍需部セブ支部長、彼の部隊もまた在留邦人を抱えていた)の話として次のエピソード⑥を著書に記している。

途中、A陸軍少将の率いる貨物廠の後方を一時歩いたことがあるが、あるときA少将が、「ああ、また海軍の厄介者が来た」と、口をすべらしたことがあった。ちょうどそのとき、駆逐艦「卯月」で遭難した岩永少尉(兵学校出身)が近所にいて、それを聞き、憤慨その際に達し、

「A少将！ 海軍の厄介者とは何ですか！」と詰め寄った。A少将は、形勢不穏と見てとり、言を左右して、言葉を濁してしまったということだ。

この出来事が起きたのは四月十六日から二十日の間である。この時点ではA少将は野戦貨物廠を率いていたとみることが出来る。それから、このA少将とは間違いなく浅間のことだろうと思われる。それは、この文の続きからわかる。

A少将は陸軍の応召、セブ軍政監だった。一言

居士で有名で、老人の関係か、よく人の嫌うことを言つては、皆に嫌われていた。

Aのイニシャルと応召の少将で軍政監という部分、加えてさらに後の文では浅間と書いてしまつてゐることから、A少将は浅間である。また、浅間の性格についても触れてゐるが、第三者にはこのように見られていたといふことだろう。

五月三日ころに浅間は「三角山」にたどり着いた。この三角山とは、ソゴト周辺の川の合流点にある山のこたらしい。浅間は野戦貨物廠等の部隊や在留邦人たちを引き連れていた。

彼らがこの地にやってきたのは、抜兵団の命令によつてだった。抜兵団は、邦人管理部隊に、海軍部隊のところに行き志柿大佐の区処を受けるように命じたのだ。つまり、陸軍は「厄介者」を海軍に押し付けたのだ。志柿大佐は邦人管理部隊に武装兵百名を南方の自衛に差し向けるように命じたのであった。それからしばらくして服部隊もやってきて海軍陣地の中に入つてきた。

大勢の厄介者を抱えた海軍部隊は果敢に三角山防衛戦を展開した。しかし、五〇〇〇人を優に超えた人員が陣地にいる。警戒線内の食糧はすべて取りつくしてしまい、集積している分だけになつてしまつた。五月二十八日、志柿大佐は邦人管理部隊に南への脱出を命じた。

信濃毎日新聞は平成五年八月十四日の記事で、この虐殺事件の詳細を伝えている。記事はフイリン国立公文書館に保管されていた太平洋米軍司令部戦争犯罪局の調査記録を基にしたものだ。

この虐殺は二回に渡つて行われた。一回目は四月十五日ころにセブ市に近いテイエンサンという町で、十歳以下の児童が対象となつた。二回目は五月二十六日ころに北部の山中で、十三歳以下が対象になつた。

殺害方法は「兵士が野営地近くの洞窟に子供だけを集め、毒物を混ぜたミルクを飲ませて殺し、遺体を付近に埋め」というものだ。二回目ではこれに銃剣が加わつた。実行者は野戦貨物廠だった。「部隊指揮官らは『子供たちが泣き声を上げたりすると敵に所在地を知られるため』などと殺害理由について供述している。」

では、命令したのは誰だろうか。

男子義勇軍の酒井は、命令者は浅間だとしている。邦人管理部隊編成後のことである。転進の最中、児童の叫び声により部隊の位置が暴露、圧倒的な火力で砲撃を受けた。このことをうけ、浅間は「十三才以下の子どもを持つ親は、全部自分の手で子どもを殺せ」と命令した⑧ののだつた。

酒井の証言は二回目の虐殺と合致する。しかし、一回目の虐殺については触れられていない。この部分は謎のままで。

どういうわけか邦人管理部隊は無事脱出に成功し、抜兵団司令部の近辺にたどり着いたようだ。具体的な地名についてはわからない。

六月四日に志柿大佐が抜兵団司令部を訪れたとき、兵団長の福栄真平(陸士二十三期、陸軍中将)はこんなことを言つたそうだ。

「君は戦争しに来たのか、どうだ?」

(中略)

「じつは昨日も、浅間閣下が来たので、君は陸軍少将でありながら、何たる態だと叱つてやつたんだ。ね、しかも陸軍だ! なぜ、海軍を指導してやらないんだ! ね、閣下だよ! それを、わざわざ僕がこんな言葉まで使つて叱つたんだ!」

その後、浅間たちはどこをさまよつていたかはわからない。少なくとも、マリアアや栄養失調に苦しみ、多くの人々が斃れていったに違いない。そして、ついにあの八月十五日を迎えたのだつた。

邦人児童の虐殺

戦閣下のセブ島である悲しい事件が起きた。邦人児童二十一名が虐殺されたのである。

自身の子を殺すことをどうしても避けたかつた母親たちは、邦人管理部隊を離れ、男子義勇軍や南方第十四陸軍病院の一部(本隊からはくれた薬剤少尉の率いる一団)、海軍第三十三特別根拠地隊などの部隊に保護を求めた。これらの部隊は彼女たちがついでくることを黙認したのであつた。

子を失つた母親たちは次のような証言を残している。「子供を殺せとの命令に、とつさに子供を隠そうとしたが間に合わなかつた」「子供が殺されたことを知り、私も死のうと思つた」「(指揮官を)殺してほしい」

浅間義雄の最期

八月三十一日、命令により浅間は米軍に降伏する。こゝになつた。浅間の衰弱は甚だしく、何度も自決を考えた。すでに自分で拳銃を操作する力はなく、秘書の木村博男は何度も浅間から自決の手助けを頼まれたという。そんな状態の浅間を、部下は担架を交代で担ぎ米軍の元へ向かつた。浅間は米軍病院に収容されるが、処置の甲斐もなく、臨終が近づいてきた。「長い間苦勞をかけてすまなかつた。有難う。ほかに云い残すことはない。もう駄目だ」と言つたのが最後だつた。⑨

九月十四日、逝去。享年六十一歳。

一九七三年(昭和四十八年)三月末、勲一等旭日大綬

章が授与された。

注

(1) 経歴は、『兵役』No.1、伊藤一男「浅間義雄陸軍少将の最期」130項に記載されている略歴を一部改変したものである。この略歴は一九四六年(昭和二十一年)十二月八日に行われた浅間の葬儀で、縁戚の関口信介が述べた弔辞から抜萃したものとされた。

(2) 伊藤一男『随想 私の戦場』252項に浅間について書かれた大阪朝日新聞の記事を引用した部分がある。「浅間神速部隊」のことと、後の浅間の言葉は、その記事に書かれていたことである。

(3) 「陸軍船舶部隊略歴」によると「第五野戦船舶廠第二支廠長」は松本光雄大尉であり、服部はマミラの「第一支廠長」であった。しかし、セブにいたのは服部であり、「陸軍船舶部隊略歴」の記述は誤りと判断し、服部が「第二支廠長」であるととした。

(4) 「男子義勇軍」の名称について、酒井は「義勇隊」としているが、一九四四年十一月八日に発令された「セブ」防作命第五七号には「男子義勇軍」とあった。本文に関して、筆者は軍側の呼称である「男子義勇軍」を採用した。

(5) 酒井三郎『傀儡部隊 セブ島義勇隊隊長の手記』2

5項。

(6) 志柿謙吉『回想レイテ作戦 海軍参謀のフィリピン戦記』233項。

(7) 同292項。

(8) 前掲『傀儡部隊』27項。ただし、文中には「深間少将(軍政長官)」と書かれている。これは仮名で記しているためと考えられる。

(9) 前掲「浅間義雄陸軍少将の最期」132項。

主要参考資料(順不同)

・福川秀樹『日本陸軍将官辞典』(芙蓉書房出版、二〇〇一年)

・伊藤一男「浅間義雄陸軍少将の最期」『兵役』No.1、戦争体験を語り継ぐ会、都立書房、一九八〇年)

・同『随想 私の戦場』(私家版、一九七三年)

・同『随想 続 私の戦場』(私家版、一九八七年)

・志柿謙吉『回想レイテ作戦 海軍参謀のフィリピン戦記』(光人社、一九九六年)

・酒井三郎『傀儡部隊 セブ島義勇隊隊長の手記』(けん出版、一九七八年)

・林田佐久良『英霊は哀しい』(文芸社、二〇〇六年)

・比島派遣野戦自動車廠戦友会『比島に散った野戦自動車廠の記録』(開発社、一九八九年)

・『一億人の昭和史 日本の戦史 3 日中戦争1』(毎日新聞社、一九七九年)

・信濃毎日新聞(平成五年八月一四日)

・アジア歴史資料センター

「C13071875600」上菌隊情報綴 昭和19年6月〜19年9月 威参情速第2号

「C13071378500」第35軍(尚)作命綴(甲) 昭和19年8月8日〜19年10月3日 比島国の戒厳令施行の件

「C13071379400」同 「ピサヤ」連絡官を区処の件

「C14061279100」セブ島「戦場補給隊作命綴 昭19.11.19.12 「セブ」防作命第57号」

「C12122416800」陸軍船舶部隊略歴 その1

「C12122416200」同 その4

「C12122480600」比島方面部隊略歴 第一四方面軍野戦貨物廠

「C12122480700」同 第一四方面軍野戦自動車廠

「C12122480800」同 野戦兵站廠(筆者注 野戦兵器廠の誤植)

(防衛省防衛研究所)

・アジア歴史資料センター「陸海軍司政官」

編集後記

この度は『(仮称)淑徳大学戦史研究会会報 第1号』をお読みいただきまして、誠にありがとうございます。

……ああ、疲れた。ただいまの日は十一月十二日午前三時である。とにかく眠い。

どうして私は今こんなにも苦しんでいるのだろうか。そもそも、会報作成の企画自体は五月には始まっていたはずだ。この時点で会員の皆は了解している。そして八月、夏休みの課題として、作文の原稿を作成するように指示を出した。ところが、その後のあれこれ諸事情で遅れが生じてしまった。そのつげが回りまわって、現在夜更かしをしながら編集を進める事態となってしまった。今の私にこの会報の題名を考える余力は残っていない。というわけでこの題名である。

毒を吐くのはこれくらいにしておこう。
おやすみなさい。

(山川栄)

(仮称)淑徳大学戦史研究会会報 第1号

2019年11月23日 初版発行

2020年11月14日 改訂第3版発行

編集・発行 淑徳大学戦史研究会

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製及び転載することは禁止されていません。